

# 「知性否定」による快樂、悪魔的な美の メカニズムの比較研究\*

—西洋・日本・韓国文学とオスカー・ワイルドとの  
影響関係を中心に—

吉美 顕\*\*

(e-mail : goldmountian@hanmail.net)

## <目次>

- |   |                           |
|---|---------------------------|
| 1. はじめに                                 | 3. 金東仁文学における「知性否定」による美の描写 |
| 2. 谷崎文学におけるオスカー・ワイルドの美意識の<br>領域化に対する再照明 | 3.1. 「狂炎ソナタ」—狂暴的な音楽の表面化   |
| 2.1. 谷崎文学におけるオスカー・ワイルド                  | 3.2. 「狂画師」—画家としての絶対美の追求   |
| 2.2. 「刺青」、「麒麟」と「ドリアン・グレイの肖像」<br>における快樂  | 4. 終わりに                   |

キーワード：美意識(Aesthetic consciousness), 悪魔(Devil), 知性否定(Intelligence negation), 絶対美(Absolute beauty), 快樂(Pleasure), 強者(Strong man), 教育者(Educator)

## 1. はじめに

オスカー・ワイルド(Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde)の「知性否定」による悪魔的な美意識がよく表れている作品は、谷崎の初期作品「刺青」(第2次第3号『新思潮』1910.11)と「麒麟」(第2次第4号『新思潮』1910.12)、金東仁の「狂炎ソナタ」(『中外日報』1930.1.1~12)、「狂画師」(『野談』1935.12)である。

\* 이 논문은 2017년 대한민국 교육부와 한국연구재단의 지원을 받아 수행된 연구임  
(NRF-2017S1A5B5A07063932)

\*\* 大田大学校、非常勤講師、日本近現代文学

「刺青」と「麒麟」には「美しい者は強者である」という美意識つまり、男性を征服する女体の賛美が顕著に表れている。谷崎の「知性否定」を通じて肉体また、快楽だけを追求する快楽主義的な「悪の勝利」という美意識は、谷崎の独創的なものではなく、オスカー・ワイルドからの影響であると想定できる。また、谷崎が文学活動を開始した視点から外国文学の影響が多分にうかがえることから、関連性を持つ多くの部分を究明する必要がある。

金東仁は韓国文学で悪魔的な美の世界を探求した作家としてよく知られている。「狂炎ソナタ」の主人公である白性朱は、芸術の誕生のためなら殺人までする美意識及び「狂画師」の卒居の知性否定による美の創出はオスカー・ワイルドと谷崎と非常に多くの点で類似している。金東仁の作品には谷崎の「春琴抄」（『中央公論』1933.8）についての所感が述べられているので、金東仁が言及する美の世界は谷崎の影響からであるということが言える。

そこで、本論文では、Static StudyからDynamic Studyへ転換して、西洋・日本・韓国という美学の相違を比較分析し、3文化圏に表れている知性否定による「悪の勝利」という美意識を中心に考察していきたい。オスカー・ワイルドが谷崎に影響を与えたのは何であり、その影響によって形成されている谷崎文学の美学は何であるかを探求する。このような結果を韓国の唯美主義作家の金東仁に照射し、西洋・日本・韓国のモダニズム文学という基本構造のフレームに形象化し、その結果を踏まえた比較及び対照研究を進めていく。また、3文化圏における知性否定による快楽、悪魔的な美意識の共通点と相違点について述べる。

## 2. 谷崎文学におけるオスカー・ワイルドの美意識の 領域化に対する再照明

### 2.1. 谷崎文学におけるオスカー・ワイルド

谷崎の初期作品「刺青」「麒麟」には外国文学からの影響が特に、ボードレール、アナトール・フランス、オスカー・ワイルド、ウォルター・ペイターなどの作品から影響が見える。その中で芸術家から墮落して快楽主義を求めている美意識はワイルド流の美の世界だと言える。谷崎はワイルドについて、「高等学校に居た頃、サロメやドリアン・グレイを読んだ時には可なり昂奮させられたものであつた」<sup>1)</sup>と告

白している。谷崎はワイルドの著作に親しみ、「サロメ」(*Salome*, 1891)の魅力に激しく眩惑されるところがあった。高校時代「サロメ」と「ドリアン・グレイの肖像」を読んだということは、谷崎の初期作品にワイルドの文学世界が反映されていることを推測できる。ここで言っている高校時代は、1905~1908年であり、谷崎が自分の文学的方向を模索し切り開いていく時期にあたる。

明治においてワイルドの名が最初に紹介されたのは、「ジャパン・パンチ」(*Japan Punch* (1883.3) の記事であり、作品としては1891年5月28日付けの新聞『自由』<sup>2)</sup>の社説で、「美術の個人主義—ラスカル・ワイルド氏の論文抄訳」(増田藤之)である。この論文は、同年2月イギリス雑誌の『フォートナイトリビュー』に発表されたものであり、抄訳とは言え、わずか三ヶ月後に紹介されたことになる<sup>3)</sup>。当時、谷崎は6歳だったので、これを読んだとは言えない。1900年11月30日にワイルドは死ぬが、その7年後の1907年に森鷗外が『歌舞伎』88号(1907年8月1日刊)に「サロメ」(仏文版1893.2)の概要を書く。これによって、日本にはサロメ・ブームが引き起こされ、『西洋文学翻訳年表』によると、森鷗外より6ヶ月早く小林愛雄が「サロメ」を邦訳しているということである<sup>4)</sup>。そしてこれ以前、夏目漱石が1906年「草枕」の中でワイルドの「獄中記」(*De Profundis*, 1905)に触れている。

それ以外にも、高橋宣勝の論文「谷崎潤一郎とオスカー・ワイルド」<sup>5)</sup>によると、ワイルドの名前や作品への言及は森鷗外以前にも行われていたことが分かる。例えば1905年片山正雄の「神経質の文学」(『帝国文学』第11巻6号~9号)、1906年島村抱月の「英国の尚美主義」についての講演、1907年岩野泡鳴の「自然主義的表象詩論」、平田禿木の「英国詩界の現状」、厨川白村の「近代詩人の時勢に対する関係を論ずる」などである。小出博によると、森鷗外は、1907年になって、「サロメ」を完訳している。「ドリアン・グレイの肖像」の序文(無署名)が1911年1月に『早稲田文学』第62号<sup>6)</sup>に紹介される。その後、始めて『ドリアン・グレイの肖像』が邦訳されたのは1923年、本間久雄によってである(『遊蕩児』(新潮社)として出版)。

1) オスカー・ワイルド(1883)「ウキンダミーヤ婦人扇」(*Lady Windermere's Fan*, 92)谷崎潤一郎訳『谷崎潤一郎全集第24巻』中央公論社、p.159.

2) 三島由起夫(1975)「谷崎潤一郎」『三島由起夫全集第25巻』新潮社、p.475.

3) 谷崎潤一郎(1981)「饒太郎」『谷崎潤一郎第2巻』中央公論社、p.357.

4) 木村毅・斉藤昌三(1933)『西洋文学翻訳年表』岩波書店、p.79.

5) 高橋宣勝(1978)「谷崎潤一郎とオスカー・ワイルド」『外国語・外国文学研究』第24号、北海道大学文学部、p.2.

6) 佐々木隆(1911)『ドリアン・グレイの序文』『早稲田文学』第62号、p.326.

高橋宣勝は谷崎とワイルドの影響関係を思わせる美意識については、影響よりはむしろ谷崎自身から発生した問題ではないかということ「校友会雑誌」の中で論証している。1907年3月の「校友会雑誌」の「批評」欄に谷崎は、次のように述べている。

「吾人は思ふ實際的美換言すれば官能的快感の美感たり得べき一部即ち聴官視官に由りて感ずる美は芸術を賞翫するに重大なる要素にして、所謂理想美も此の官能的美を介して後に感ぜられるべきものなりと。」 「吾人は思ふ。唯美ならば即ち足る、吾人の同情は善なるが故に惹起せらるるものならずして寧美なるが故に惹起せらるる也と」

「官能的快感の美」というのは、谷崎文学の基調となっており、このような唯美主義の姿勢はワイルドのものと一致している。このような世界は谷崎の独創的なものというより谷崎がワイルドの美意識や作品の内容に関心をよせた結果、それが自分の作品に濃厚に反映することとなったと考えられる。

谷崎精二は「当時兄はワイルドの唯美主義、快楽主義に心酔し、元祿袖の着物などを着て得意になっていた」<sup>7)</sup>と言及しており、実際、谷崎はワイルドの「サロメ」の翻訳を頼まれたが、時間がないという理由で断っている。谷崎がワイルドを初めて翻訳したのは、1919年の「ウエンダミーヤ夫人の扇」(*Lady Windermere's Fan*, 1892)である。

1910年11月に発表された「REAL CONVERSATION」では、谷崎のあだ名がワイルドになっていることが分かる<sup>8)</sup>。佐藤春夫が「オスカー・ワイルドと云へば当時大流行でもあつたし、潤一郎も愛読したことは世間で知つている通りである」<sup>9)</sup>と言っているように、谷崎がどれほどワイルドに関心を持っていたのかがよく分かる一文である。

谷崎のワイルドに関する言及はいろいろな作品の中で見られるが、特に「ドリアン・グレイの肖像」の影響が見える作品は、「The Affair of Two Watches」(『新思潮』1910.10)である。そこには(ヘンリー卿が言っている)「「心霊の悩める時は官能の快楽を追ひ、官能の悩める時は心霊の快楽を追へ。」と云ふやうな事を云つて居るが、私

7) 谷崎精二(1969)『明治の日本橋・潤一郎の手紙』新樹社、p.117.

8) 「木村。すると此所へはオスカ、ワイルドにヒュイスマンスにシヨオが寄り合つた訳なんだね。和辻。今度ワイルド君は何を書くんた。谷崎。僕は幫間つてもを書かうと思つている—(後略)—」

和辻哲郎・木村荘太・谷崎潤一郎(1911)「REAL CONVERSATION」『新思潮』新潮社、p.69.

9) 佐藤春夫(1949)「潤一郎。人及び芸術」『文芸谷崎潤一郎読本臨時増刊』河出書房、p.11.

は茲に一つの真理を発見した。曰く「強烈なる心靈の苦痛は、偶ま些細なる肉体の苦痛を以て滅却する事を得さうだ、……それに違ひない」<sup>10)</sup>とある。快楽主義者にとって快楽とは生そのものであり、その「生」とは快楽に酔い続けることである。さらに「頭のからっぽな、美しい生きもの」を発見したヘンリー卿の話は小説「饒太郎」の基礎をなしている。

「『ドリアン・グレイの肖像』の印象が無かったとしたら、「饒太郎」<sup>11)</sup>は生まれなかったにちがいない」<sup>12)</sup>のである。谷崎のワイルドに対する言及は明治期だけではなく、大正期に発表した「捨てられる迄」<sup>13)</sup>(『中央公論』1914.1)の中でも見える。また、「呪はれた戯曲」(『中央公論』1919.5)の中では、ワイルドの名の言及だけではなく、ワイルドの美の概念をそのまま使用している<sup>14)</sup>。

谷崎作品にはワイルドの言及が多く、実際、影響を受けたと思われるが、谷崎にとって、ワイルドの名は、否定的に扱われているという意見もある。小玉晃一はその理由について、中央公論社の「谷崎潤一郎全集」30巻を調べてみたが、ワイルドの名は、五回しか出てこず、それもその名は否定的な意味をもってしていると主張している<sup>15)</sup>。これについて、小出博は「頻度数の少ないこと、否定的なことを意地悪く考えるならば、私は逆に並々ならぬ影響があり、否定は充分の肯定の上に立つがゆえの不満と見る」<sup>16)</sup>と反対意見を述べている。谷崎の全集でワイルドが、何回出てくるかが重要なのではなく、谷崎が果たしてワイルドから影響を受けたのかどうかという問題をとりあげるべきである。

「ドリアン・グレイの肖像」への言及はそれほど多くはないが、谷崎の本格的な小説が始まる前に、谷崎がヘンリー卿の言葉をそのまま引用していること、「自然は芸術を模倣する」というワイルドの美の概念をそのまま使っていることによって、谷崎の作品にワイルドの影響があるのは確かである。さらに初期だけではなく、大正期にもワイルドの影響が窺えるのは、その影響の度合いが大きかったからであると言える。

10) 谷崎潤一郎(1981)「The Affair of Two Watches」『谷崎潤一郎全集第1巻』中央公論社、p.48.

11) 饒太郎の小説の基礎の思想は「世の中はからっぽである」と「世の中は美しいからっぽである」ということである。谷崎潤一郎(1981)「饒太郎」『谷崎潤一郎全集第2巻』中央公論社、p.358.

12) 高田端穂(1965)『近代耽美派』塙選房、p.99.

13) 「ドリアン、グレイの狡計に依つて五体を溶解された画家の如く、さう云ふ女の手にかかつて秘密に此の世を去る事が出来たら、ベスヴィアスの噴火口に飛び込んだ哲学者より幸福であらう。」

「捨てられる迄」谷崎潤一郎(1981)「饒太郎」『谷崎潤一郎全集第2巻』中央公論社、p.191.

14) 「自然は芸術を模倣する」とワイルドは云つたが、私がこれから話をする恐ろしい物語の中に現れるような意味に於て、「自然」が「芸術」を模倣した例を、私はまだ外に聞いたことも見たこともない。」

谷崎潤一郎(1981)「呪はれた戯曲」『谷崎潤一郎全集第6巻』中央公論社、p.287.

15) 小玉晃一(1964)「潤一郎と外国文学」『国文学 解釈と教材の研究』學灯社、p.79.

16) 小出博(1971)「谷崎潤一郎とワイルド序説」吉田精一編『日本近代文学の比較文学的研究』光明社、p.260.

## 2.2. 「刺青」、「麒麟」と「ドリアン・グレイの肖像」における快楽

谷崎の「刺青」の冒頭に「其れはまだ人々が「愚か」と云ふ貴い徳を持つて居て、世の中が今のやうに激しく軋み合はない時分であった。」という文章があるように、「愚徳礼讃」<sup>17)</sup>は「ドリアン・グレイの肖像」(*The picture of Dorian Gray*, 1891)で言っている「知性否定」と非常に似ている。「知性否定」を通じて美の世界を描写したのは谷崎とワイルドの共通点であると見られる。

「刺青」と「ドリアン・グレイの肖像」には、徹底的に精神の世界を否定し、肉体または快楽だけを追求する性向が見える。このような世界は「麒麟」でも同じである。霊公は妖婦的・悪魔的な南子夫人の肉体を求めるが、孔子の出現によって、道徳と知性に傾いていく。ところが、結局、霊公は「知性」を否定し、南子夫人の所に戻り、夫人の肉体を耽溺する。

一方、「ドリアン・グレイの肖像」では、画家バジルはドリアンに出会うことによって新しい芸術を創出する。ドリアンはバジルにとって美の創出のための絶対的な存在であり、彼はドリアンに会ってからは世界の中では大事なことは、二つしかないと思っている。それは「芸術にとつて新しい手段が現はれること」、もうひとつは「芸術のために新しい人格が現れること」<sup>18)</sup>である。したがってドリアンはこのバジルに「芸術上の様式を暗示」してあげたのである。このように画家のモデルになっていたドリアンは、人に「悪い感化を与へる」ヘンリー卿の快楽教育によって快楽主義者になる。実際、ドリアンはヘンリー卿と対話をしながら、「新しい感化が自分の心の中に動いて居ること」を意識し、それは「自分自身から実際湧き出たもののやうに」思われた。ヘンリー卿はドリアンに「官能を以て心霊を治し、心霊を以て官能を治す」と言い、自分の快楽の哲学を語る。

君が有つて居る驚異の生活をし給へ！いつも新しい官能を求め給へ。何物をも怖れてはいけない。……新快楽主義——それが我世紀の欲するものだ。君は此主義の具体的な表徴になれないものでもない。君の人格を以てすれば、君に出来ないものは何もない。世界は一時は君のものになつて居るだらう<sup>19)</sup>。

ヘンリー卿はこのやうな論法によって、ドリアンの本能を呼び起こそうとし、ドリアンもまたそう

17) 「其れはまだ人々が『愚』と云ふ貴い徳を持つて居て、世の中が今のやうに激しく軋み合はない時分であつた。」谷崎潤一郎(1981)「刺青」『谷崎潤一郎全集第1巻』中央公論社、p.63。

18) ワイルド(1995) 矢口達沢訳「ドリアン・グレイの画像」『ワイルド全集I』日本図書センター、p.74。

19) ワイルド(1995) 矢口達沢訳「ドリアン・グレイの画像」『ワイルド全集I』日本図書センター、pp.98-99。

いう異端哲学に恐怖と反発を感じながらも徐々にヘンリー卿の予期通りに動いていく。ドリアンはその論法によって墮落し、快楽だけを求めるようになる。ヘンリー卿の講義やドリアンの快楽の追求には、ペイター(Walter Horatio Pater)の耽美思想「ルネサンス」(*Studies in the History of the Renaissance*, 1873)やマリウスの姿が反映している<sup>20)</sup>。

「ワイルドの唯美主義ドクトリンはまさにペーターに学んだもの」であり、ワイルドは「『ルネサンス』を読み、この本が彼の単に芸術観のみにでなく、彼の一生にStrange influenceを与えたということを認めている」と平井博は『オスカー・ワイルドの生涯』で述べている。さらにワイルド自身も「僕の精神と感覚のゴールドン・ブックすなわち美の聖書になったのだ」<sup>21)</sup>と言っているように、ワイルドにとってペーターの「ルネサンス」は福音書であったにちがいない。「知性否定」はワイルドの独創的なものではなく、ペーターからワイルドへ、ワイルドから谷崎へ繋いでいるものである。

ヘンリー卿はドリアンの快楽主義への傾倒に気づき、さらに徹底的な快楽主義者を創造しようとする。これはいわゆる「人格改造」である。このような様相は「刺青」の中でも窺える。清吉は、妖婦的で男を弄んだ年増のような、さらに足が白くて美しい女を見つけ、その女に悪魔的な絵を見せ、清吉は次のように言う。

この絵の女はお前なのだ。これはお前の未来を絵に現したのだ。私はお前さんのお察しの通り、其の絵の女のような性分を持つて居ますのさあ。

この文章からも清吉の願望が見える。彼の願望は妖婦的な娘に魔性の絵を見せて悪魔的な女性を作ろうとしていることである。このような清吉の行動は、明らかに娘の教育者としての役割を果たしている。清吉は絵を通して、彼女の本能を呼び覚ましている。ヘンリー卿、清吉にとっての目的はこのように新しい人格の創造である。

「親方、私はもう今迄のやうな臆病な心を、さらりと捨ててしまひました。  
——お前さんは真先に私の肥料になつたんだねえ」と、女は剣のやうな瞳を輝かした。その耳には凱歌の聲がひびいて居た。

清吉の教育によって女の人は改造され、清吉の目的は達成できる。清吉には知性は要

20) 「ドリアン・ 그레이の肖像」はワイルドの師匠であるペイターや、「ユイスマンス(Joris-Karl Huysmans)の『ア・レブール』も活用している。平井博(1960)『オスカー・ワイルドの生涯』松柏社、p.93.

21) 平井博(1960)『オスカー・ワイルドの生涯』松柏社、p.26.

らない、自分の快樂主義に合っている女体が要るばかりである。ただ、ヘンリー卿は自分の哲学、清吉は「肥料」の絵を手段とした点異なるだけである。「麒麟」の南子夫人も酒と香水と残忍な光景を利用して教育を行なっている教育者である。したがって、「人格改造」の役割は「ドリアン・グレイの肖像」ではヘンリー卿が、「刺青」は清吉が、「麒麟」では南子夫人が担当している。

教育者のヘンリー卿はドリアンのすばらしい美貌を礼賛して、美の価値を与えるために、「美は天才の一形式だ—実際は天才よりも勝れた形式だ」<sup>22)</sup>と言ひ、外の美貌の重要性について言及する<sup>23)</sup>。ドリアンはヘンリー卿の論理によって、結局は破滅してしまう。ドリアンは永遠なる青春と外貌を維持するため、自分の魂を悪魔に売ることになり、永遠なる若さへの情熱に翻弄されてしまう。ところが、倫理的な道德家である画家バジルは邪悪醜怪に変わっていったドリアンの容貌をありのままに描き、ドリアンによって殺される。

ドリアンは快樂を追求した結果、罪意識が感じられなくなり、バジルの描いた絵を破って魂の自由を得ようとするが、結局は死に至る。ドリアンの悪魔主義は敗北し、ヘンリー卿が芸術家として精魂を傾けた画がもとのままの美しさを回復するところでワイルドは「悪魔主義を乗り越えた芸術至上主義の勝利を歌い上げ」ている。ワイルドにとって「快樂の所在を探ることが罪の意識のために必要な倫理となつた」<sup>24)</sup>のであり、罪はワイルドにとって「ただ罪であるがゆえにまた、快樂であるべきだつた」のである。実際、ドリアンも「ヘンリー卿の哲学はあなたを幸福にしますか？」という公爵夫人の質問に「僕は決して幸福を求めたことはありません。誰が幸福なんか要るもんですか？僕は快樂を求めてきたのです」と答えるように、ワイルドは人間の本質を快樂であると思ひ、ドリアンをそのようなつまり知性否定によって創出された人物として描写している。

谷崎とワイルドは「知性否定」の描写のために、快樂主義と悪魔主義を求め、また、その世界の実現のために墮落者を登場させたのである。「ドリアン・グレイの肖像」のドリアンの墮落者への変貌、清吉の芸術家から刺青師への墮落、官能の世界を楽しむ享楽人として現れる靈公などがそれである。また、谷崎とワイルドは「芸術家は美しきものを創造する」という美的概念を同じくしている。そのためにドリアンは非情にも自分の恋人のシビル・

22) ワイルド(1995) 矢口達沢訳「ドリアン・グレイの画像」『ワイルド全集Ⅰ』日本図書センター、p.79.

23) 「グレイ君、神々が君に親切だつたのだ。が、神は与へたものを速かに奪つてしまふものだ。君にしても、真に、真に、完全に、十分に生活するのはほんの此二三年間だ。—(中略)—『時』は君を嫉んで居る、そして君の百合の花君の薔薇の花に挑戦して居る。君は顔色が黄色くなり、頬は落ち、眼はどんよりとなるだろう。君は怖ろしく悩むことだろう。……………ああ！若さのある間に若いだけのことをし給へ。」

ワイルド(1995) 矢口達沢訳「ドリアン・グレイの画像」『ワイルド全集Ⅰ』日本図書センター、p.98.

24) 三島由紀夫(1975)「オスカア・ワイルド論」『三島由紀夫全集第25巻』新潮社、p.333.

ヴェインを捨てる。その理由は彼女が妊娠し、妊娠という思いがけぬ事件によって彼女が現実の世界の女性となるからである。このような考え方は、生活より芸術の方が上位だと考えた谷崎と似ている。しかし、谷崎とワイルドとの両作家にはそれぞれの作品には相違点もある。「ドリアン・グレイの肖像」は美的な対象が男性であり、そのような男性に惹かれたヘンリー卿はドリアンの人格改造をし、その結果ドリアンは墮落者としてその世界へ傾倒、破滅してしまう。男性の教育によって男性が変わったと言える。「刺青」は、美的対象が肉体の美であり、それは生きた女体の魅惑である。その美は常に女体にかかわる快楽とともに存在しており、清吉の「人格改造」は成功を収めている。それは娘の「お前さんは真先に私の肥料になつたんだねえ」という言葉によって、清吉の願望が成就したことが分かる。

「刺青」では教育者は男性であり、その男性の教育によって女は強者になる。「麒麟」も「刺青」のように、女性が美的対象であるが、美的な女性が男性を教育するという点が「刺青」とは異なる。

谷崎の作品においては、芸術家や悪魔的な女性は予想される通り、勝利を収めている。「ドリアン・グレイも、美と醜を合わせ持ち、悪魔と契約を結んだ誘惑者」であったが、谷崎の場合は、「美と醜」に「悪」を化合させたのではなく、「美しい者は、強者であり、醜い者は弱者である」ということが前提になっている。谷崎は肉体的な美を揚揚高潮した点と主人公の破滅の傾向がないということがワイルドと最も異なる点である。さらに、「刺青」ではワイルドの作品で扱われている官能と魂の関係を触れていない。何よりもワイルドと一致する「官能的な快楽の美」が「刺青」や「麒麟」に投影されている。ただ「美なるものの中に美なる意味を見出す者は、啓発された人である」<sup>25)</sup>というワイルドの美の概念に谷崎も軌を一にしていることが分かる。

「麒麟」の霊公の快楽の追求がワイルドの言う官能と魂の関係の実践である。それは教育者による霊公の心境の変化から分かる。教化のため、衛という国に孔子が入る。妖婦的な南子婦人の魅力に惹かれ征服されている霊公は、孔子の教わりに感心を持つ。

「わたしは世の中の美色を求めて南子を得た。また四方の財宝を萃めて此の宮殿を造つた。此の上は天下に覇を唱へて、此の夫人と宮殿とにふさはしい権威を持ちたく思うて居る。どうかして其の聖人を此処へ予呼び入れて、天下を平げる術を授かりたいものぢや」

25) 佐々木隆(1911)『ドリアン・グレイの序文』『早稲田文学』第62号、p.326.

靈公は、孔子から「政の道」、「天文四時」を教わってからは彼の心を左右するのは、夫人の言葉ではなく、聖人の言葉であった。南子夫人は、自分から靈公を奪いあげた孔子を誘惑するために、お酒やいろいろなものでもてなすが、孔子は揺れずにいる。夫人は自分の「嫉妬を買つて、鼻を削がれ、両足を刎たれ、鉄の鎖に繋がれた美女」の光景を見て、さらに「詩人の如く美しく、哲人の如く厳肅」になる。このように、南子夫人は妖婦的であり、悪魔的な面を持っている。やがて孔子は自分の徳の世界と南子夫人の妖婦・悪魔的な世界とはふさわしくないといい、衛という国から離れていく。ところが、一時的に孔子の徳の世界に傾いた靈公は悪魔的な表情の南子夫人を見て、それに惹かれて南子夫人のところに戻ってくる。ここで注目したいのは南子夫人である。彼女は知的な要素には一向の感心もなく、最初から知性を否定し、悪魔的な世界を満喫し、その世界へ入るように孔子や靈公を誘惑する。南子夫人の妖婦的な肉体を耽溺した靈公は孔子の徳つまり、知性の世界に傾いていくが、南子夫人の誘惑に負けて孔子の知性を否定し、南子夫人の懐に戻る。

「私はお前を憎むで居る。お前は恐ろしい女だ。お前は私を亡ぼす悪魔だ。しかし私はどうしても、お前から離れることが出来ない。」と、靈公の声はふりて居た。夫人の眼は悪の誇に輝いて居た。

上の引用文からも分かるように、悪魔的な南子夫人に靈公は征服されたと言える。両作家の作品では「知性否定」以外にも「墮落論」「快樂主義」それに、「『芸術家は美しい物を創造すべきだ』」26)という美意識も同一である。また、「美こそ時の亡ぼし得ぬ唯一のものだ」27)と言ったワイルドの世界と、生活より芸術の世界が第一だと考えていた谷崎の世界とは同じものである。「ドリアン・グレイの肖像」のドリアンはヘンリー卿に快樂主義の教育を受けて、墮落の世界に落ちるが、快樂と道徳との間でさまよう。一方、「刺青」では娘が清吉の教育に感化され、悪魔的な女性に変わるが、その娘には、道徳や精神的な世界でさまよう面は伺えないように、谷崎の場合は徹底的に精神を否定したことが分かる。谷崎作品の特徴は「知性否定」＝美である28)。

26) ワイルド(1995) 矢口達訳「ドリアン・グレイの画像」『ワイルド全集 I』日本図書センター、p.79.

27) 井村君江(1911)「日本におけるオスカー・ワイルド」『鶴見女子大学紀要』第7号、p.41.

28) この論文の2-1と2-2の部分は、ワイルドと谷崎との比較のために吉美顕(2009)「谷崎とワイルドにおける美学の表象—「ドリアン・グレイの肖像」と「刺青」「麒麟」を中心に—」『韓国日本学会』第79輯、pp.135-147.の内容を纏めて加筆したものである。

### 3. 金東仁文学における「知性否定」による美の描写

#### 3.1. 「狂炎ソナタ」—狂暴的な音楽の表面化

韓国文学で金東仁は唯美主義作家としてよく知られている。金東仁が日本に3年間滞在した時期の日本文学は自然主義の解体の時期であり、その解体は大正期文学を目にした東仁の芸術観、芸術意識に相当な影響を与えたと言える。

東仁文学において唯美主義の代表的な作品は「狂炎ソナタ」(1930)「狂画師」(1935)が取り上げられる。この両作品は知性を否定し、芸術のためなら放火、殺人、屍姦までも辞さないという特徴を有する。それは両作品の題名にある「狂」という字からも感じられる。金東仁の「知性否定」は金東仁の独創的なものではなく、オスカ・ワイルド→谷崎、谷崎→金東仁へと続いているものである<sup>29)</sup>。この三人の作家は、教育者を登場させて、「知性否定」の実践、それを通じて悪魔的で力のある美を表面化するという共通点がある。谷崎が外国作家の中でワイルドに対する言及の頻度数は26回<sup>30)</sup>であるが、金東仁の場合は一回しかない<sup>31)</sup>。それにも関わらず「狂炎ソナタ」と「狂画師」にワイルドの述べている美意識が顕著に表れているのは、金東仁がワイルドから谷崎へ伝わっている美意識に陶醉していたからであると見られる。

東仁は「芸術家は自己の欲求に忠実している個人主義者という芸術家意識を一生維持した作家である」<sup>32)</sup>と評価しているように、文壇初期から金東仁の欲求は、美であった<sup>33)</sup>。

私の行動は美だ。なぜかという、私の欲望から出たものなので・・・私はすべてを美の下に入れようとした。・・・こうして私の狂気のような放蕩は始まった。今まで憧れていたが世間体のため、あるいは道德概念のため汚いと言われている数えきれない狂気の行動が始まった。「狂炎ソナタ」には「狂気の行動」の複線として「機会」という

29) 吉美顕は西洋・日本・韓国3文化権における美意識についての比較論文が多数あり、このような論文で西洋から日本、日本から韓国への影響関係を明らかにしている。また、谷崎と金東仁との比較分析による韓・日文学における美意識の相違点と類似点を分析・検討した論文もある。

30) 金春美(1985)『金東仁研究』高麗大学民族文化研究所、p.182. セクスピア(36回)、クエテ(29回)、トルストイ(29回)、ワイルド(26回)。

31) 「芦月は当時には一つの悪魔主義の信徒オスカ・ワイルドの崇拜者として純粋な学研であった。余等は評論が不足な『創造』誌上にオスカ・ワイルドの学説を紹介するために芦月を引っ張っていたのである。」金東仁(1931.8.6.)「文壇懐古」『毎日申報』

32) 金春美(1985)『金東仁研究』高麗大学民族文化研究所、p.170.

33) 金東仁(1988)「韓国近代小説考」『金東仁全集8』朝鮮日報社、p.603.

言葉が出てくる。「狂気の行動」によって美が創出されるが、「狂気の行動」の表出は「機会」と刺激を必要としている。

人の天才性という場合によっては、どんな「機会」がなければ永遠に表れない、その「機会」というのがある人にはその人の天才と「犯罪本能」を同時に引き出せるならば、私たちはその「機会」を呪うべきでしょうか。祝福すべきでしょうか。

この「機会」からは二元的な道徳と芸術との対立という内面の葛藤の構造が見られる。上の引用文は音楽評論家が社会教化者に「機会」について話をしている場面であるが、この二人の会話からも善と悪との対立が窺える。それは悪による美の創出を追求している音楽評論家が社会教化者に対し、芸術のためには「犯罪本能」を呼び起こす「機会」が不可欠なものであると主張しているからである。

「狂炎ソナタ」には教育者である音楽評論家と被教育者の白性洙によって善や道徳は踏みこじられて狂暴的な美の世界だけ展開されている。白性洙は亡き母の復讐のためタバコ屋に火を付けて燃えている炎をみて、恐怖を感じながらも力のある、狂暴的で野生的なピアノ曲を作る。これが「狂炎ソナタ」である。「ベートーベン以来、近代音楽家では見たこともない」ような音楽を聞いた音楽評論家は、白性洙を自分の家に連れていき「狂炎ソナタ」のような曲が誕生できるよう、次のような部屋を設ける。

広々している北向きの部屋、東南側にあるベッド一つ、西北側にある飾りひとつもない机といすとピアノひとつ。ところが、部屋のかざりといえば西南側にある大きな鏡、電灯の下に座っていると怖気立つ。

また、白性洙は部屋の黒い壁、窓越えに見える枯木からも「鬼気」を感じているが、できあがった音楽は力のない、ただの音響の遊びにすぎなかった。葛藤している白性洙に音楽評論家は「思ったとおりにしろ、すべて規則と規範を無視して、心から湧いてくる通りに」して楽曲を作るように言う。このように音楽評論家は白性洙を教育して狂暴的な音楽が生まれないことに気づき、知性を否定することになる。

沈鬱した白性洙はある日、道ばたに置かれている稲をみてふと火を点け、燃えさかる炎に興奮して曲を作る。それが、「憤怒の波」である。このように刺激と「機会」を通し野生的な力のある芸術が生まれる。白性洙は死体を凌辱し「血の旋律」、屍姦による「死霊」を作る。このような音楽からは一抹の知性もつかうことができない。白性洙は野生的で狂暴な音楽の創出のためには殺人まで犯す。この殺人はドリアンが自分の美貌を守るため画家を殺したことと同一の行動である。

白性洙の音楽は天才的であるが、「狂気の行為」は一般人にとっては犯罪である。ここで注目したいのは、白性洙の天才的な音楽は音楽批評家によって語られているだけで市民たちには知られていないということである。音楽批評家の根回しによって殺人者である白性洙は死刑囚から精神病者になり、彼の行為からは白性洙の「狂気の行動」による狂暴的な音楽の誕生を擁護していることが分かる<sup>34)</sup>。狂暴的な美の追求は「ドリァングレイの肖像」のヘンリ卿の美意識と通ずる。さらに、善の価値観上に芸術がある絶対美は清吉とも一脈相通である。

「狂炎ソナタ」に表れている「狂的な事件は美の絶対性を生命を代償に追求する東仁の傲慢な気質の結果」<sup>35)</sup>であると言える。金東仁の狂暴的で野生的で力のある美の描写は、狂暴的な音楽の誕生を渴望する音楽批評家の欲望や知性の否定によって完成される。

### 3.2. 「狂画師」一画家としての絶対美の追求

ワイルドと谷崎と金東仁は「知性否定」による絶対的な美の描写のため、快楽主義と魔主義を容認し傾倒していった。その美の世界の実現のためにワイルドはヘンリ卿、谷崎の場合は清吉や南子婦人、金東仁は音楽批評家K氏という教育者を登場させている。

「狂画師」の主人公卒居がどのように美の世界を現出するのかについて探求すれば「狂画師」の美の要諦が分かる。

「狂炎ソナタ」では、語り手である音楽批評家K氏によって美意識が描出されているように、「狂画師」でも余という語り手によって卒居の美意識が述べられている。金東仁は自分の考えている美意識を語り手を通じて表現しようとしたことから余と音楽批評家K氏は金東仁自身であることは間違いない。

「狂画師」での卒居の外貌についての言及に注目したい。卒居の顔は日中人に顔を曝して歩けなくらい醜い顔であるので、暗くなってから道を歩く人物として描かれている。醜い顔を形容するすべての形容詞が該当する顔の主人としてその顔がとても大きく遠くからみてもその存在がはっきり見える。

卒居は結婚するが、翌朝、卒居の顔を見た嫁は驚愕して逃げる。彼は2回の結婚の破綻によって、人家と離れている森の中で生活する。卒居は醜い外貌から劣等感が生じ、人間の世界から逃避していく。結婚の失敗は彼の劣等感を募らせる要素となり、それは世

34) 音楽批評家が社会教化者に話していることから白性洙を代弁や庇護していることが分かる。「放火？殺人？つまらない犬、つまらない人は彼の芸術の誕生のため犠牲になってもおしくありません。千年に一度、万年に一度出るか出ないか分からない大事な天才を、いくつかのどんでもない犯罪の口実で捨てるということがもっと大きな罪ではないでしょうか。せめて私たちの芸術家にはそう思われる。」

35) 鄭漢模(1959)『現代作家研究』汎潮社、p.201.

間への復讐へと変貌する。

卒居は自然を描いたが、どんどん美女の表情を描きたいという気持ちが湧き上がってきた。ところが、彼は人々の顔を描いても描いても自分の望んでいるような絵にはならなかった。その中で卒居は母の顔を描こうと決心する。

卒居の母は、稀世の美女である。卒居は母が自分の顔を「涙組んで見つめている表情」を忘れることもなく、震えるほど懐かしくなるときもある。「大きな目にある涙、そうでありながらも憧憬と愛撫で輝いた目、微笑んでいる」、さらに、「雷のように刹那的に心眼に表れて、直ぐに消えてしまう」幻影のような母の顔を描きたくなった。このように「狂画師」で美意識の凝集されているのは、卒居の微かな意識の中で強烈に残っている母の絶対美である。卒居は美貌の亡き母や美女たちの顔を描いて、世の中の男たちに復讐しようとする。それは、嫁を娶り、幸福な生活を過ごしている男たちを見ていたからである。卒居は世への憎悪心まで芽生え、美人像を描こうとする心がますます膨れ上がっていく。

卒居の母は稀世の美人であるが、卒居の顔は醜い。このように二人の対照的な様相は、卒居の母を絶対的な美の所有者、特に、この世の中では相対性のない存在の人物として描写するためである。二元的な対照を一元化しようとする「一元的絶対美の創造のため意図的に極と極の二元的対立と衝突を試みている」<sup>36)</sup>という金東仁の美意識の概念が十分に伺える。このような美意識はワイルドの美意識と酷似している。

純粹で美しい青年ドリアン・グレイは、肖像画が自分の代りに年をとってほしいと願い、それが実現する。消画像はドリアン・グレイの悪行によってその悪が表情に刻まれる。消画像と実物のドリアン・グレイとの二元的な対照による美意識の創出が一元化され一つの(美)意識へ帰納されていく。

卒居は、始めは自分の家内として美女像を、それがどんどんこの世の中で誰よりも美しい美女を描き、そのたびに復讐心が募っていく。卒居の美女像は薄らいだ記憶に残っている母のような美女である。卒居は母のような絶対的な美女を探すが、中々見つからない。ところが、ある日、森の谷で目が見えない少女と出会う。この少女と母との共通点は「憧憬と愛撫」に溢れている目である。卒居は少女を家に連れていき、竜宮の話聞かせながら憧憬に溢れている目の少女の肖像を描く。そのうち、暗くなり絵が描けなくなった卒居は目だけ描き残していた。その日、卒居と少女は男女の関係になってしまう。

卒居が母のような美女に執着しているのは「近親相姦的」な要素があるからだと言及し

36) 李文九(1995)『金東仁小説の美意識研究』図書キョンイン、p.87.

ているが<sup>37)</sup>、それより卒居は絶対的な美女を描きたいという欲望が強いからである。金東仁は、卒居の願望つまり絶対的な肖像画の完成のため、盲人の少女と出会わせる展開が絶対に必要であった。

初夜を過ごした少女の目からは「愛撫や憧憬」が消えて、男の愛を求める欲望に満ちている目に化している。卒居は自分の母と酷似している少女の目を絶対美だと思っていたが、その美の喪失性によって、少女に「愛撫や憧憬」が溢れている目に戻るようお願いつつ童宮の話聞かせるなどして教育するが、少女の目はそのような目になれなかった。卒居は少女の胸ぐらをつかむみ、その力が強くなればなるほど少女の目には恨みが現われるだけである。少女は結局卒居に殺される。卒居が死んでいる少女の胸ぐらを放したとたん、少女の体は硯に倒れ、その墨が画幅の少女の肖像の目に弾んで少女の消画像は完成される。この美女像をみた卒居は驚愕し座り込む。それは、少女の目には恨みに溢れている目そのものであったからである。

金東仁の場合は、「憧憬と愛撫」が溢れる目で女体美の描写を、谷崎は「足」と「目」を通じて女体美を追求した。ところが、「刺青」における目の部分の描写を見ると「狂画師」とは異なる。

「親方、私はもう今迄のやうな臆病な心を、さらりと捨ててしまひました。  
———お前さんは真先に私の肥料になつたんだねえ」と、女は剣のやうな瞳を輝かした。その耳には凱歌の声がひびいて居た。

娘の「剣のやうな瞳」は清吉の教育によって、男性を征服する悪魔的な女になったという意味の目である。「狂画師」の少女は、「憧憬と愛撫」の目を失い、結局、教育者である卒居に殺されてしまう。

卒居は少女から知的要素を排除し、ひとえに「憧憬と愛撫」の目を要求し、教育したのであるが、結局、絶対美は昇華できず、世間への復讐もできなかった。彼は自分の描いた美女の絵を持って歩き続けながら死を迎える。金景姫は卒居の行動や考え方について心理的に分析している<sup>38)</sup>。不安な雰囲気育てられた子供は自身の欲求と衝突を調節する自我の形成に欠陥ができ、あるいは、神経質的な性格になると言っている。このような神経質は精神的に分裂症までもたらす。卒居の場合はこの世に復讐する葛藤、外貌から発生

37) 白鉄(1982)「解説金景姫「狂画師」の心理的研究」『金東仁研究』セムン社、p.45.

38) 白鉄(1982)「解説金景姫「狂画師」の心理的研究」『金東仁研究』セムン社、p.43.

している劣等感、隠遁の生活から抑圧されている生活、亡き母のような美女像を描こうとする執着からノイローゼになり彼は狂人になる。卒居の死や女性から知性を求めないのはドリアンとも同じである。現実的ではない理想の世界の永遠なる絶対美を追求しているばかりである。

シビルはドリアンの実名や家柄のことは何も知らない。ただシビルはドリアンの容貌に見惚れて崇拜し、信頼している。ところが、ドリアンは、彼女が舞台上で虚構の人物として生きようとする意欲と力を失って失望し、彼女を捨ててしまう。ドリアンに捨てられたシビルは自殺してしまう。ドリアンはシビルが舞台上で虚空の女優として生きてほしかったが、妊娠した彼女が現実の女性として戻ったので捨てるのである。シビルとヘンリー卿はドリアンの知性は否定しているのであるが、二人はまったく対照的な面がある。ヘンリー卿はドリアンと出会ったとき、彼の美貌に惹かれ、彼を教育して洗練している男に、さらに知性否定による快楽主義者に作り上げるのである。

ドリアンは、自分の肖像画を見て、初めてその美しさに目覚める。ヘンリー卿の教育によって悪魔的な世界に陥り、悪行し、その世界を楽しむ。このような快楽主義によって、醜悪になった肖像画の顔を見て、自分自身を殺すのである。

「ドリアングレイの肖像」や「刺青」、「狂画師」には知性を否定し、ひとえに絶対美を求める教育者が登場するが、それぞれの様相は異なる。「ドリアングレイの肖像」や「刺青」は教育者（ヘンリー卿、清吉）によって教育される側の人格が変わるが、「狂炎ソナタ」、「狂画師」では教育者の意向の通りに被教育側の人格が変わらない。一方では三つの作品では共通点がある。それは知性を否定し、美を賛美し、享楽を謳歌するということである。

#### 4. 終わりに

本稿では、西洋から日本へ、日本から韓国へ流れてきた知性否定による絶対美の誕生をめぐる述べてみた。さらに、美意識について分析する上で、三人の作家ワイルド・谷崎潤一郎・金東仁の美意識の相違点と類似点を検討した。

谷崎の芸術家から墮落して快楽を求める美の世界はワイルド流の美の世界と酷似している。また、もう一つの共通点は教育者による教育される側の人格の変化である。さらに、

「ドリアン・グレイの肖像画」と「刺青」との知性否定による美の誕生は類似点であると見られる。

「ドリアン・グレイの肖像画」のドリアンはヘンリー卿の教育によって墮落し、魂を悪魔に売り、快楽の世界を楽しみながら悪行をする。また、非常に美しい自分の肖像画に見惚れていたドリアンは生きている自分自身は美しいママであるが、肖像画の顔は年を取り、醜悪な顔になっており、結局はその肖像画を破る。彼は悪魔に変わっている自分の顔を描いたバジルを殺し、自分自身も死を迎える。

谷崎が登場させている教育者清吉は教育の成功を納めている。このようなところが「ドリアン・グレイ」と異っている点である。清吉の教育によって娘は悪魔的な女に変わり、清吉を征服する強者になる。妖婦的な南子婦人の肉体を耽溺していた霊子は孔子の徳の教育によって知性の方に傾いていくが、南子婦人の誘惑に負けて知性を否定し、南子婦人の懐に戻り、快楽の世界を楽しむ。谷崎の知性否定による美の創出はワイルドと似ているが「刺青」「麒麟」では知性否定を通じる死の描写は見当たらない。これが相違点である。

谷崎と金東仁との共通点はやはり知性否定による美の描写である。金東仁は「狂炎ソナタ」では、音楽評論家の教育や幼いころの母が聞かせてくれた音楽の教育を否定し、自分の本能から出てくる野生的で、狂暴的な音楽を創作するのである。

「狂画師」の男主人公卒居からの知性は毫も見えない。さらに外貌も醜い人物として描写されている。このような外貌のため疎外感を感じた卒居は、絶対美の象徴である亡き母のような女性を描き、この世に復讐しようとする。卒居はある日、母ほど目が美しい絶対美の少女と出会い、彼女の消画像を描くが、日が暮れて完成できなかった。翌日、卒居は少女の目が「愛情と憧憬」に溢れていない存在であることに気づき、竜宮の話をかせるなどいろいろ教育するが、少女の人格は変わりなく、男性の愛情だけ求める目となっていた。それは卒居と少女は男女関係になっていたからである。結局、卒居は彼女を殺す。

このように三人の作家の共通点は知性否定による美意識の創出であるが、それぞれの美意識の表現は異なる。ここで注目したいのは、知性否定は教育者によるものもあるが、最初から知性否定の主人公もいる。その教育によってドリアンの場合は悪魔に魂を売る悪魔主義者になり、清吉の場合は清吉の教育によって娘は悪魔的な女に変わり、男性を征服する悪魔の勝利の凱歌を揚げ、また、霊公は知性を否定し、女性の肉体を耽溺する快楽主義になる。金東仁の場合は教育者による、男性を征服する悪魔的な女性の描写が見えない。ただ、知性否定による力のある狂暴的な美が生まれている。

知性否定による美意識は西洋から日本へ、日本から韓国へ流れてきたのは確かである

が、それぞれ共通点と相違点がある。

### 【参考文献】

- 吉美顕(2019)「谷崎潤一郎と金東仁文学における美の形成としての母像」『日本語文学』第87、pp.247-262.  
(DOI: <http://dx.doi.org/10.21792/trijpn.2019.87.013>)
- 金東仁(1931.8.6.)「文壇懷古」『毎日申報』大韓毎日申報.
- 金東仁(1988)「韓国近代小説考」『金東仁全集8巻』朝鮮日報社、p.603.
- 金春美(1985)『金東仁研究』高麗大学民族文化研究所、p.170、182.
- 白鉄(1982)「解説金璟姫「狂画師」の心理的研究」『金東仁研究』セムン社、p.43、45.
- 李文九(1995)『金東仁小説の美意識研究』図書キョンイン、p.87.
- 鄭漢模(1959)『現代作家研究』汎潮社、p.201.
- 井村君江(1911)「日本におけるオスカー・ワイルド」『鶴見女子大学紀要』第7号、p.41.
- オスカー・ワイルド(1983)「ウキンダミーヤ婦人扇」(*Lady Windermere's Fan*, 92)谷崎潤一郎訳『谷崎潤一郎全集第24巻』中央公論社、p.159.
- 木村毅・斎藤昌三(1933)『西洋文学翻訳年表』岩波書店、p.79.
- 小出博(1971)「谷崎潤一郎とワイルド序説」吉田精一編『日本近代文学の比較文学的研究』光明社、p.260.
- 小玉晃一(1964)「潤一郎と外国文学」『国文学解釈と教材の研究』學灯社、p.79.
- 佐々木隆(1911)『ドリアン・グレイの序文』『早稲田文学』第62号、東京堂書店、p.326.
- 佐藤春夫(1949)「潤一郎。人及び芸術」『文芸谷崎潤一郎読本臨時増刊』河出書房、p.11.
- 高田端穂(1965)『近代耽美派』塙選房、p.99.
- 高橋宣勝(1978)「谷崎潤一郎とオスカー・ワイルド」『外国語・外国文学研究』第24号、北海道大学文学部 p.2.
- 谷崎精二(1969)『明治の日本橋・潤一郎の手紙』新樹社、p.117.
- 谷崎潤一郎(1981)「饒太郎」『谷崎潤一郎第2巻』中央公論社、p.357.
- \_\_\_\_\_ (1981)「The Affair of Two Watches」『谷崎潤一郎全集第1巻』中央公論社、p.48.
- \_\_\_\_\_ (1981)「刺青」『谷崎潤一郎全集第1巻』中央公論社、p.63.
- \_\_\_\_\_ (1981)「饒太郎」『谷崎潤一郎全集第2巻』中央公論社、p.191、358.
- \_\_\_\_\_ (1981)「呪はれた戯曲」『谷崎潤一郎全集第6巻』中央公論社、p.287.
- \_\_\_\_\_ (1981)『谷崎潤一郎全集第24巻』中央公論社、p.159.
- 平井博(1960)『オスカー・ワイルドの生涯』松柏社、p.93.
- 三島由起夫(1975)「谷崎潤一郎」『三島由起夫全集第25巻』新潮社、p.475.
- 三島由起夫(1975)「オスカー・ワイルド論」『三島由起夫全集第25巻』新潮社、p.333.
- 和辻哲郎・木村荘太・谷崎潤一郎(1911)「REAL CONVERSATION」『新思潮』新潮社、p.69.
- ワイルド(1995) 矢口達沢訳「ドリアン・グレイの画像」『ワイルド全集 I』日本図書センター、p.74、79、98、pp.98-99.

논문 투고 일자 : 2020. 06. 30.

논문 심사 일자 : 2020. 07. 20.

게재 확정 일자 : 2020. 07. 24.

---

<要旨>

---

「知性否定」による快楽、悪魔的な美のメカニズムの比較研究  
—西洋・日本・韓国文学とオスカー・ワイルドとの影響関係を中心に—

吉美顛

本稿では、西洋・日本・韓国3文化圏を中心に知性不定による美意識について、主にオスカー・ワイルド、谷崎潤一郎、金東仁三人の作家を中心に共通点と相違点について述べてみた。三人の作家は教育によって悪魔的な美の誕生や知性否定による美の創出は共通点であると見られる。ワイルドと金東仁は知性否定による狂暴的な美の追求やそのため最後に死を迎えるというところが共通している。ところが、谷崎の場合は知性否定による悪魔的な女性の誕生、その男性を征服して、悪の勝利の凱歌を上げるのみ、死は見当たらない。このような点が相違点であると見られる。

A Study Comparing and Analyzing the Epicurean,  
Devilish Recognition of Aesthetics in Anti-Intellectualism:  
With a Focus on the Impact and Relationships between the West, Japan,  
and South Korea

Gil, Mi-Hyun

In this paper, we mainly discuss the aesthetics of indefinite intelligence, with a focus on three cultures: the West, Japan, and Korea. These cultures are represented by the writers Oscar Wilde, Junichiro Tanizaki, and Kim Dong-in, who share similarities in that they express beauty through the birth of demonic beauty or the negation of intelligence. Wilde and Kim Dong-in pursue mad beauty through the denial of intellect and, eventually, death. However, in Tanizaki's work, the birth of a demon woman through the denial of intellect, the conquest of a man, the victory of evil, and death are not found.